

特集論文

近・現代数寄屋建築 に関する考察

「数寄屋建築家」中村外二の作品分析を通して

A Study on the Modern Sukiya Architecture

An analysis on the works by the "Sukiya Architect": Sotoji Nakamura

澤田 和華子 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程

Wakako Sawada / Doctoral Program, Graduate School of Media and Governance, Keio University

十九世紀後半の「近代」の幕開けには、既に日本建築の生産・流通体系は高度に規格化し、独自の近代的なシステムを確立していた。その後日本の建築界は、西洋の概念に拠る「建築」の領域の他に、伝統的な建築産業に依拠したもう一つの建築領域が存在する二重構造となる。「日本的なるもの」を執拗に追求した歴史的経緯、また「家元的構造」の成立によって、「数寄屋」という特定の伝統建築分野が華開いた。裏千家の出入り大工であり、「数寄屋建築家」と称された中村外二（1906-1997）の作品からその芸術の一面を明らかにする。

When Japan opened its' country to the Western culture after the Meiji Restoration, the architecture industry was already highly systemized and qualified in terms of wooden construction and manufacturing of timber. In Japan, together with the main stream of the "architecture" industry in Western terms, there has always been another stream of architecture industry which survived through "modernization". The long search for their national identity, and the feudal structure of the tea culture, helped a specific field of traditional wooden architecture-Sukiya to regenerate in modern Japan. In this thesis, the art of modern Sukiya is studied through an analysis of works by a master carpenter of the Ura-Senke School of tea, Sotoji Nakamura, who is also known as the last "Sukiya architect" in Japan.

Keywords: 近・現代数寄屋、数寄屋大工、中村外二

はじめに

日本における「数寄屋造り」¹の歴史は五百年以上に及ぶ。世界には、各地の風土に適した木造建築が多く存在するが、これ程までにその美的価値が追求されたものは稀である。近代において「日本的なるもの」が追求され、その代表格として数寄屋建築が紹介されて以来、主にその空間性について多くの研究が進められ、現代建築に反映されてきた。しかし、数寄屋建築の本質は、その空間性のみならず、その素材、技術に集約されていると言える。

日本では、西洋の建築の概念と技術が流入する以前から長い鎖国期間を経て独自の「近代化」を果していた。木造建築の生産技術は川上から川下まで高度に規格化され、全国的な展開を見せていた。それ故に、近代の数寄屋建築は、モダニズムの影響を強く受けながらも独自の領域を確保する事ができたと考えられる。

数寄屋建築は、「日本的な」建築様式として再解釈される事で近代社会に再生されたという歴史的経緯を持つ。しかし、近世の生産構造を基盤にする事で、近代建築の領域とは別の木造芸術の領域が成立する事になる。その領域では、伝統的な技術・素材を継承されながら、新たなデザイン言語を生み出され、独特の木造芸術が育まれた。

本研究は、「近代数寄屋建築」を以上の様な観点から、再度歴史的に位置付ける事を目的とする。本稿では、まず近代の数寄屋建築界の構図を整理した上で、これまで見過ごされてきた家元の創造的活動と「家元制度」について言及する。そして、この制度により近世の建築産業構造が継承され、「家元的構造」とも言うべき特殊な産業構造が成立した経緯について述べる。さらに、この産業構造を基盤として育まれた木造芸術について、ある数寄屋大工の仕事を通して具体的に分析を進める。

本稿は、作品の実測調査と一連のヒアリング調査に基づいているが、その分析を通じて、これまでの「近代数寄屋建築」とは異なる性質を持つ建築の姿が浮き彫りになる。

1 近代の数寄屋建築界の構図

幕末、既に弱体化していた茶道界は文明開化によって決定的な打撃を受ける。本来なら、伝統建築産業はモダニズムの波に押され歴史と化すが、日本の数寄屋建築は例外であった。本節では、近代における数寄屋建築界の構図を概観し、主に三つの担い手によって数寄屋建築が現代的意義を獲得した経緯について述べる。

1.1 「数寄者」による数寄屋の展開

開国後の日本の伝統芸術は、海外流出と政治的な状況によって危機的な状況にあった。その保全に寄与したのは、「数寄者」と呼ばれる財閥や個人資産家である。彼らは、美術収集家として、現在では国宝となっている巻物、仏像などの美術品や、排仏毀釈により破壊された建築物の部材（木鼻など）などを高価な値で購入した。所謂コレクターと異なるのは、彼らが自らを「数寄者」と呼び、その美術品を使用して大規模な茶会を開き、政治的な場として利用した事である。

彼らは、伝統的な茶道の流儀に拠らず、それぞれ独自の思想を展開した。その思想は、建築、庭園のデザインにまで及び²、伝統的な大工との共働で新たな数寄屋文化を育む事になる。その建築の特徴は、能舞台など茶道以外の芸能のための場が設置されたり、解体された寺社建築の古材を用いるなど、既存の芸術分野から様々な要素を取り上げ、編纂していく所にある。数寄者の自由闊達な創造は、その後の数寄屋建築の展開に大きく影響するが、その芸術は奢侈的な要素も強く一般化される事はなかった。

1.2 建築家による数寄屋の展開

近代建築家は、数寄屋建築をモダニズムの文脈において再評価する事で伝統建築を新時代の様式と結び付ける事に成功した。西洋でモダニズムの原理を学んだ建築家が日本でその正統性を得るために、伝統的な日本建築と矛盾をきたさない事を証明する必要があった。そのために、数寄屋建築の構成美に着目し、ナチス・ドイツから逃れて来日した B. タウトという人物を通して、桂離宮が日本を代表する「ほんもの」の建築であると提唱し

たのである。現在世界で認識されている「数寄屋」はこの当時の言説で決定付けられている。

ここでの数寄屋建築は、モダニズムで提唱された合理主義、線と面による構成(コンポジション)という観点から評価され、さらに「構築的・物的」な西欧建築に代わる「空間的・行為的」な日本建築に新たな可能性が見い出された。近代建築家は、伝統的な数寄屋建築界に様々な普請を通して関わり、思想的・技術的に影響を与え続けている。³

1.3 「家元」による数寄屋の展開

江戸期には、茶道は武士の嗜みとして全国に流布しており、それを統括する制度として「家元制度」が成立していた。それぞれの流派⁴の正統な血筋を引く家元が、点前を教授する資格を与える封建的な制度⁵である。家元は、茶道を主に女性の嗜みとして一般に流布させる事で、現在に至るまで数百万の茶道人口を確保する事に成功する。

建築史の文脈では、家元の活動について扱う事は稀である。しかし、数寄屋建築産業は、家元を中心に展開する茶道界の上に成り立っている。また、建築分野でも家元が果たす役割は大きく、全国に広まる個人所有の茶室の設計に影響を与えている。家元は、「大衆」という新たな茶道の担い手のための新たな点前と茶室を展開していた。

2 数寄屋産業の「家元的構造」

建築家と数寄者による数寄屋建築の展開は、伝統的な数寄屋建築の世界に新風を吹き込み、その歴史に新たな章を加えた。しかし、その建築生産自体を支える産業は、この様な思想的な改革だけでは成立し得ない。特に数寄屋建築の場合、木材を始めとする特殊な素材の生産と流通、丸太を扱う高度な技術を要する。その産業を支えたのが、本節で述べる「家元制度」である。この制度によって「家元的構造」とも言うべき特異な状況が成立し、数寄屋建築の領域が独自のものとして存在する事が可能となった。

2.1 「家元制度」の特質

「家元制度」は、江戸期から日本芸能(武道、華道など)の分野で成立し

た極めて封建的な組織形態である。その特色についてここでは、特に建築の分野において重要と思われる項目を挙げる。

①段階的な許状の交付、「奥義／秘義」の存在

茶道の点前の授授は、段階的に行われ、最終段階の点前は「奥義」「秘義」とされ、門外不出とされる。建築の場合においても、現在裏千家今日庵に存在する茶室で点前を行う事は宗匠にしか許されず、当然一般には公開されていない。唯一、その日常的な修復に携わる職人が間近でその作品に触れる事ができる。

②千家流とされる点前、道具・茶室の意匠の無断借用の禁止

茶室には、伝統的に「写し」と「好み」という概念がある。前者は伝統的な茶匠の茶室をそのまま復元する事を言い、後者はその特徴的な部分を取り入れた茶室の事を言う。「写し」に関しては、家元の許可を得なければ造営する事が許されない。また、「当世流」と呼ばれる当代宗匠独自の「好み」が存在し、その時代に適した茶道のあり方が常に追求され、更新されていった。

③茶道の規格化／七事式の制定

大衆化された茶道人口に対応するために、茶道を伝授するための方式として「七事式」⁶が発明された。その稽古を行うためには四畳半（小間）十八畳間（広間）の組み合わせが必要となり、その2つの和室に水屋、露地を加え最小限、茶道に必要な空間として一般化された。

家元制度の内容は、①②に見られる様な封建的な要素と同時に、③に見られる大衆的な要素を合わせ持っている。この絶妙な組み合わせによって、現在では数百万を超える茶道人口を統轄しながら、同時に品格の高い芸術文化を維持する事が可能となっている。

2.2 数寄屋産業の「家元的構造」と「当世流」

「家元制度」によって、数寄屋建築産業は下図の様な図式を持つ事になる。家元の造形活動を支える大工を始めとす職人とそれに特化した林業が存在する。そして、茶室建築の空間構成や意匠が「数寄屋造り」として住宅、商業建築などに応用される事で一つの建築産業が成立する。その産業構造は

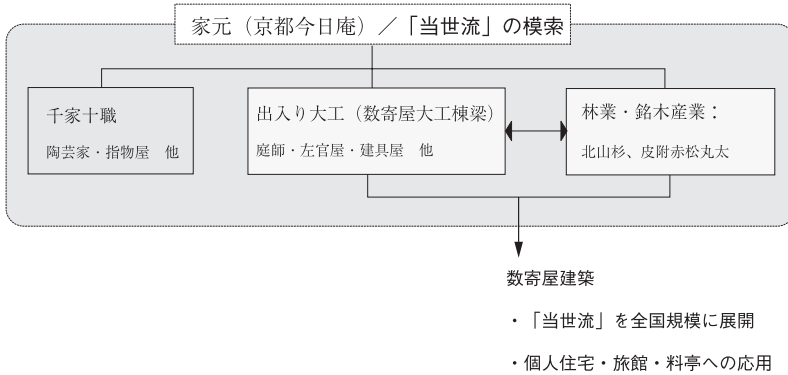


図1 「家元的構造」の概念図

封建的な性質を持ち、家元の活動に直接携わる職人、そこで使用される木材は最高級のものとなされ、差別化されている。

ここで着目したいのは、「当世流」という概念である。つまり、全体の中心となる茶室の造形は固定されたデザインではなく、常にその時代に適した形で宗匠が変革を行う流動的なものとなっている。家元の出入り大工として特権的な地位を持つ大工棟梁と職人が、家元と共にそれまで日本に蓄積されていた建築技術・素材・構成を再編成し、新時代の茶室空間を生み出す。そして、それが今度は家元の手を離れ、大工棟梁によって様々な建築に応用されていく。

3 現代に継承された近世の建築生産システム

冒頭で述べた様に、日本の建築生産システムは江戸期において既に高度に規格化され独自の近代的（効率的な大量生産という意味で）な方式を確立していた。「家元的構造」によってその数寄屋産業は保全されるが、近代の周辺状況の変化に即して変質した。近・現代数寄屋建築は、その根底に流れる思想と深く関係する生産システムが変革される事で、それまでの歴史的な数寄屋建築とは性質が異なる事が想定される。本節では、林業、建

築技術、大工の組織形態について、近世から引き継がれた建築産業の特質と近代におけるその変質について述べる。

3.1 木材の生産・流通機構

数寄屋に限らず、日本の木造建築の生産は日本の森林と密接な関係を持っている。数寄屋建築を構成する板材と丸太材は、長い歴史を経て獲得された建築材料である。

板材は、歴史的には大規模な寺社建築に必要とされた大径材、長木材に相当する。中世に大鋸（縦挽鋸）が使用される様になってから、天井板や板戸などに面的に使用される様になり、その意匠性が増した。しかし、古代から主に檜と樺の大径木が建築用材として大量に伐採され、特に多くの建造物が建てられた近畿地方では、都市に近接する森林は全て二次林に変わっていた。大名はさらに奥地、遠隔地へ理想的な木材を追い求め、秀吉の時代には全国の森林が管轄下に置かれ、京都に全国の最高級の木材が集積する構図が生まれた。さらに、家康の時代には、奥地・遠隔地の木材を運搬されるためのインフラが整備を行われる。現在の板材の市場は、歴史的に形成された木材の流通機構を基盤としている。

一方、数寄屋建築では、利休が裏山（二次林）に生えている様な赤松や杉などの「野材」を主要材として導入する。これらの野材を高級仕様に仕立てたのが数寄屋であるとも解釈できる。元々建築には不向きとされていた材を使用するだけに、川上から川下まで特殊な生産技術が要される。近世に数寄屋建築が武士、町人の住宅、商業施設として広く流布する様になると、数寄屋建築用材に特化した林業：「北山杉林業」⁷が生まれた。現在でも数寄屋建築の主要材には北山杉が使用されている。

以上の様に、近世から板材の場合は流通機構、丸太材の場合は林業が継承されるが、近代においては社会的な状況の変化によって良質な木材を入手する事が困難になる⁸。そのために、大工の仕事の中でそれまで以上に木材の仕入れの重要性が増す。

3.2 数寄屋建築の技術

数寄屋造りは、細い丸太を主要材として使用するため、特に接合部で高

度な技術を要し、様々な種類の木材を使用するために木材自体の扱いも難しい。このような特殊な技術を持つ大工は「まるもの」を扱う大工として他とは区別される。その技術体系も近世から引き継がれた重要な要素の一つであるが、その内実については「奥義／秘義」とされて明らかになっていない事が多い。

一方で、近代建築家による極端に細い横材の利用や部材省略によって、接合部にボルトを使用する必要性が生じ、そのボルトの利用が一般的になる。隠れた技術としての金物の使用の他に、空調や電気などの近代的設備の導入によって木材自体を扱う技術も高度化した。

3.3 大工組織と普請の形態

近世京都の町家普請では、大工はいくつかの特定の家に「出入り」し、大工仕事以外の日常的な仕事も行ってた。その中で特に技術が優れた大工は公共の建築事業にも登用され、茶道の家元へ出入りする大工はその普請を通して多くの経験を積み、「数寄屋大工」として身を立てる事ができた。近代の家元制度の下では、特に数寄屋大工棟梁が工務店として起業する事で、その他の職人も統括する。全国的な広まりを見せた茶道人口のために、広域に渡り京都の数寄大工による小規模な作品が展開された。

以上に、数寄屋建築産業の「家元的構造」によって近世の建築生産システムが継承されつつも、近代社会に即した形で変化していた事について述べた。次に、裏千家の出入り大工として活躍する傍ら「数寄屋建築家」と呼ばれた大工棟梁の普請歴と仕事の内容からその実態を明らかにする。

4 「数寄屋建築家」中村外二

中村外二（1906-1997）は、京都の数寄屋大工棟梁である。富山県石動市に生まれ、戦後京都で裏千家家元と大徳寺の出入り大工として活躍する一方、国内外に三百棟近い作品を展開している。その内容は多岐に渡り、日本の伝統建築に蓄積された技術・空間構成・ディテールなどが凝縮されている。また、特に素材の利用に関して中村外二独自の思想が展開され、日本の伝統建築が新たな局面を迎えた事を証明している。

本節では、中村工務店へのヒアリング調査を通じて明らかになった事象から、中村外二の普請歴を整理し⁹、その作品に関わった人物との関係を通してその芸術の一面を明らかにする。

4.1 修業期間

中村外二は、出身地の石動町の大工棟梁水田常次郎に十五歳の時に弟子入りし修業を始め、日本中の建築現場を渡り歩き木造建築の技術を習得した¹⁰。戦後、京都に活動拠点を移し、「まるもの」（丸太普請）を扱う以前は建築家村野藤吾の作品を手掛けていた。その内容は必ずしも伝統的な日本建築ではなく、比叡山ホテルなどアクロバティックな構法技術を要する作品もある。これらの現場を通して、中村外二の木材を扱う技術は錬磨されていく。昭和22年（1947）から村野藤吾設計の旅館「千草」を通じて丸太普請の世界に入り、昭和28年（1953）に裏千家、続いて大徳寺への出入りを果たした。以後、「数寄屋大工棟梁」として活動する様になる。

4.2 大工としての系譜¹¹

中村外二は、元々京都出身の大工ではないが、京都の伝統的な数寄屋大工の技術の系譜を引き継いでいる。これは、「中村工務店」を創設し、戦時中に一度解体された大工組織の優秀な人材を雇い入れた事による。その系譜を図式化すると以下の様になり、京都の野村碧雲荘や四君子苑を手掛けた名匠北村捨次郎の系譜を継いでいる事がわかる。その影響は、木材の選定や部材の接合技術、さらに軒下などのプロポーションにも表れている。

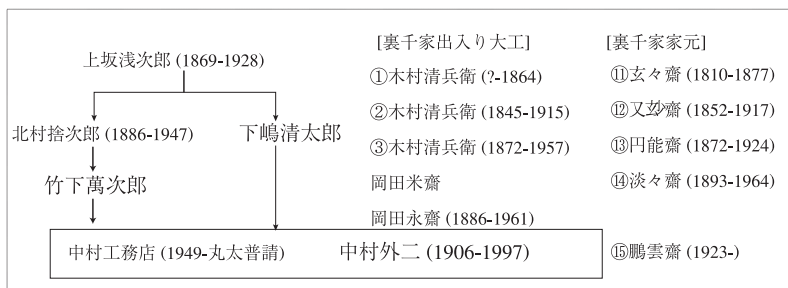


図2 中村外二の大工としての系譜

4.3 「当世流」の展開／十五代家元と松下幸之助

普請歴を見ると、裏千家の出入り大工となってから、茶室、数寄屋造りの住宅などの普請を年に四、五棟、多い時には十六棟のペースで全国各地に展開している。これらは、ほとんどが四十坪以下の小規模な建築である。同時に国外でも多くの作品が存在するが、これは裏千家が茶道を海外に紹介する一貫で造営されたものである。

これらの建築の中には、中村外二自身による設計・施工の作品も多くあり、その哲学が如実に表われた作品であると言える。そしてその根底には、家元の出入り大工として「当世流」の茶室空間を追求する過程で得られた造形コンセプトが存在すると思われる。

その「当世流」の建築は、裏千家十五代家元千宗室鵬雲斎と松下幸之助（真々庵松下宗晃）との共働の中で創造されていった。松下幸之助は、冒頭で述べた「数寄者」の部類に入るが、裏千家家元と密接な関わりを持ちながらいくつかの茶室を造営している¹²。その全てが中村外二の施工となっており、設計から施工まで三者が関わり合いながら進められている。松下幸之助の茶道では、「和敬静寂」という理念が強調され、「目まぐるしく変化する都会の日常生活から離れて心を落ち着かせる場所」として、茶室を茶道文化の中でも重要な要素として取り上げている。その理念は、現代の日本人に広く受け入れられる事を可能にする様な平易さ／分かりやすさを持っている。それが「当世流」の表現として、中村外二の創作活動を通じて展開されている事が想定できる。

4.5 施主との関係

施主の中には、主に裏千家の茶道に携わる施主の他に、唐津焼の人間国宝中里太郎右衛門や鳥海青児¹³、下保昭¹⁴などの近代日本画家など近代日本の芸術文化を担う重要な人物が散見される。普請を通して、各々の施主の精神性が中村外二にも影響を与えたという事は十分に考えられる。

4.6 建築家との関係

中村外二の作品で近代建築家による設計のものは多いが、特に木材の選定、加工そして茶室の構成に関しては棟梁の意見が強く反映されている。

吉村順三との普請には、新興宗教の神慈秀明会の祭事棟などの大規模な普請、数寄屋建築用材を現代住宅に応用したニューヨークのロックフェラー邸、さらに中里太郎右衛門邸などの住宅作品もあり、多様な展開を見せている。また、これらの普請を通して、伝統的な数寄屋建築には見られない様な空間の操作を棟梁自身が習得したという事も考えられる。

5 「数寄屋建築家」の仕事内容

本節では、ヒアリング調査や現場見学を通じて明らかになった中村外二の仕事のプロセスを記述する。中村外二の仕事の内容は、実際の建設だけではなく木材の買い付け、ストック、選定までに及ぶ。設計図面の中にその哲学を表現する西欧の概念の「建築家」とは異なり、数寄屋大工の哲学はその仕事の全プロセスの中に表れる。その仕事内容を丁寧に追う事でその作品の本質に迫る手掛かりを得る事ができる。

5.1 出入り大工としての仕事

中村外二は、裏千家今日庵と大徳寺の出入り大工として、茶室などの日常的な修理・修復も行っている。これらの建築は国宝級の文化財であり、一般の目に触れる事はなかなかない。出入り大工はその建築を詳細に研究する事ができ、ある意味では情報を独占している事になる。大工は、数寄屋造りの技術的・寸法的な参照物として、江戸期に広く流布していた木割書を用いながら、一方で古典建築の実測などを通じてその空間・技術について学んでいた。その過程で新たな古典の解釈が生まれたと考えられる。

5.2 木材の買い付けとストック

第三節で近代の森林の状況の変化によって、数寄屋大工の仕事における木材の買い付けやストックの重要性が増した事について述べた。木材の価格が高騰する事で、価格が安い立木の段階で木材の質を見極める目を養う必要があった。森林の状況、気候、樹木の生地条件など様々な要素について考慮に入れる必要がある。中村外二が特に好んで使用した木材に松があったが、その杣目の「素直さ」が品格のある建築空間を生み出す。その様な空間を演出する様な杣目を持つ材料になるか、立木の状態で判断する

必要があるわけである。

中村外二は、良質な木材を全国各地で収集し、その大量の木材は京都にある七つの木材置き場に保管されている。近世までに大名や貴族が全国の銘木を集め普請に使用したが、近代においては、数寄屋大工がその役割を担い、林業の現場と密接な関係を持った。収集された木材は、その美しさが最大限に活かされる普請が出てくるまで倉庫に保管される。

5.3 木材の選定（木寄せ）と設計

普請が決定すると、施主は中村外二と共に木材の倉庫で一本の床柱を選定する。それは、施主の人間性と床の間に掛けられる予定の掛軸の印象によって決められる。その床柱を手掛かりとして他の部材の素材と寸法が決定される。つまり、建築の木割が決定される。

その時点で中村外二によって図面が引かれるが、伝統的な指図と異なり、近代的な図面に近いものとなっている。下図は、後述するS邸の平面図と小間の展開図の一部である。寸法は、尺寸法とメートル法の両方で真々制により記述される。全体平面図で、「柱心」として○・四寸のズレが記述され、四畳半と八畳間の基準柱径が示されている。

また、展開図の中の柱は、木材の元と末の寸法を違えて記述されており、例えば吉田五十八の図面では真直ぐに引かれた線と比べると、木材の性質が図面にも反映されている事がわかる。

5.4 建設現場

各部材は、京都の工務店で加工され、遠隔地の場合はトラックで部材が運ばれ、現場で組み立てられる。現場では、それぞれの柱や横材が紙で包まれ、柔らかい北山杉の木肌に傷がつかない様に細心の注意が払われる。現場施工の最終段階には「洗い屋」と呼ばれる職人が入り、部材を丁寧に洗い、その過程で接合部に問題がないかチェックする。

また、施工現場では庭師や左官などの職人も共働り、微細な寸法の調整を行っていく。年間に手掛ける施工現場が増えるに連れて、中村工務店の優秀な大工が「世話役」として現場を仕切る事になるが、棟梁自身も現場を渡り歩き、細かい寸法の調整を行った。

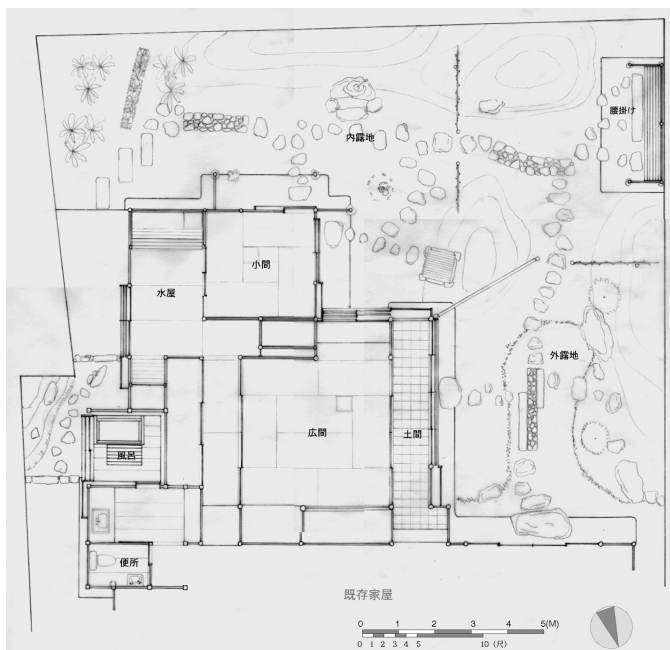


図3 S邸平面図

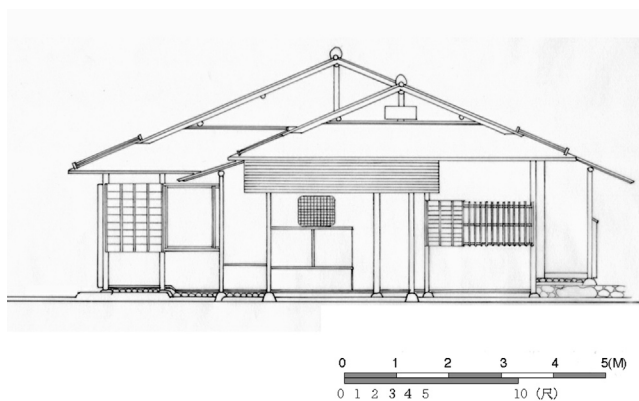


図4 S邸立面図

5.5 メンテナンス

数寄屋建築で使用される木材には、皮付赤松丸太の様に虫害に合いやすいものもあり、木材の収縮により接合部が弱くなる事も考えられる。二十年を目処に部分的に木材を交換したり、洗い屋によって接合部を確認する事が必要となる。中村外二の仕事は、広域に広がるため、そのメンテナンスは特に問題となる。洗い屋を含め、数寄屋の建設に携わる職人は京都に集中し、また交換する部材も京都の中村工務店から運搬する必要がある。一方で、何年にも渡るメンテナンスの必要性から工務店と施主との関係が保たれ、近世の「出入り」の構図が保たれている事がわかる。

中村外二の仕事内容には、木材に対する徹底したこだわりが見られる。近代以前よりも大工が森林と密接な関係を持ち、さらに多様な施主との関わりの中でそれまでにない数寄屋建築のコンセプトが生まれたと仮定する事ができる。

6 作品分析

本節では、普請歴と仕事のプロセスで得られた仮説を実際の作品の分析を通して証明する。中村外二の作品の一つを詳細に実測調査をした結果から、その空間構成、寸法体系、素材からその特徴を分析する。

6.1 作品の概要

S邸は、昭和五十七年(1982)に中村外二の出身地でもある富山県石動に立地する。施主は、油絵を趣味とする医者で、裏千家の茶道を教授する妻のために既存の家屋に増築する形で茶室が造られた。棟梁自身による設計・施工の作品であり、裏千家の系統を持つ普請である事から当然「当世流」の特徴が良く表れた建築であると言える。

6.2 配置と外観

敷地は、北西方向に延びており、手前から病院、駐車場と蔵、木造住宅があり、その最奥の敷地に二十五坪の「茶室」¹⁵と茶庭が増築された。「茶室」は、八畳間、四畳半と水屋から成り、近代茶道で規格化された小間十広間の構成そのままである。茶室の他に風呂場と便所が併設されている。

既存の家屋からは、廊下を伝って各室にアプローチする方法と、露地に降り立ち、茶庭からアプローチする方法と二通りある。雪国の建築である事から、露地が利用できなくなった時のために広間の前に土間が設けられている事も大きな特色である。

建物全体の構成は、小間・水屋と広間・風呂場に二分され、異なる寸法体系を持ち、雁行して配置された空間を入母屋の屋根が覆う様な形になっている。敷地が狭いため、俯瞰される事はない外観は、「起り」を持つ屋根の形状によって柔らかい印象を与える。また積雪に耐えるために軒先は浅くしており、他の作品に見られる様な横に向かって軒先が伸びる様なイメージはない。

6.3 各室の構成と寸法体系

①四畳半（小間）と水屋

小間は、「四畳半切りの本勝手で下座床の構え」となっている。天井は床の間側は網代の平天井で踊り口に向かって掛込天井となっている。四畳半は千利休以前から茶室の標準的な広さとされているが、その歴史の変遷を追うと、主に平面構成、天井高などの寸法体系や部材による壁面の構成によってその茶匠の精神を表現している。ここでは、古典の茶室とS邸の比較を試み、「当世流」の特徴を明らかにする。

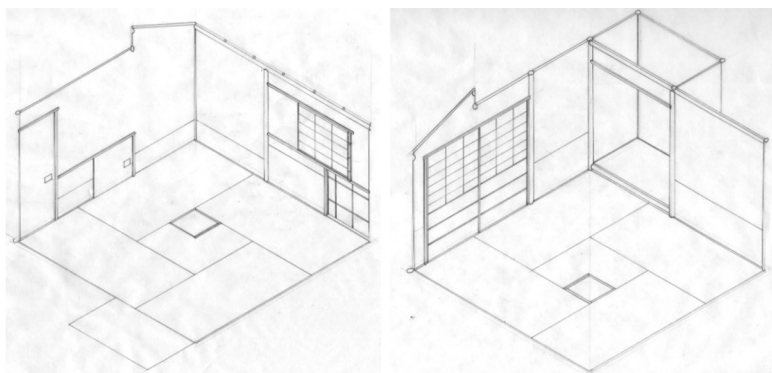


図5 S邸小間アイソメ図

まず、図5でS邸の四畳半の平面構成と古法を比較すると¹⁶、まずS邸が下座床となっている所に違いがある。下座床の構えは、亭主が点前を行う際に床の間に背を向ける構成であり、謙遜的な精神の表れと解釈することもできる。また、開口は、蹴り口・茶道口の他に貴人口があり、自由度のある明るい空間構成となっている。

壁面構成を見ると、最も求道的な空間と言える又隠は、茶道口側脇の柱が消され、入隅の柱がほとんど壁に塗り込まれているのがわかる。天井高を極限まで低くした結果、二つの壁面を一体化する事で圧迫感を消している。S邸の茶室では、又隠と同じく茶道口脇の柱は消されているが、入隅の柱は細いが完全に塗り込まれてはいない。天井を高くしながら、空間の緊張感を保つためと考えられる。

また、腰貼りの客側に貼られる高い紺地のものが、蹴り口の脇まで貼られ、全体の割合として主人側の低い白地よりも多くなっている。これは客数が相対的に多いのを見越しての事と考えられる。

次に、主な寸法を図表にして比較する。柱径は、古式では、二寸八分となっ

表1 S邸小間と古法の寸法体系

	利休家之図 (聚落屋敷)	又 隠	S邸四畳半 「和静庵」
菰天井高さ	五尺九寸	五尺八寸七分	六尺二寸
軒桁高さ	五尺二寸	五尺二寸三分	五尺五寸
蹴り口高さ	二尺二寸五分	二尺二寸五分	二尺三寸八分
幅	二尺二寸	二尺一寸	二尺三寸五分
下地窓高さ	二尺一寸七分	二尺一寸七分	二尺一寸
幅	一尺九寸七分	一尺九寸七分	二尺三寸
勝手口高さ	五尺二寸	五尺二寸	五尺一寸
幅	二尺	二尺	二尺
貴人口高さ	—	—	五尺
幅	—	—	五尺六寸七分
床の間口	四尺三寸	四尺二寸七分	四尺四寸二分
床の深さ	二尺四寸	二尺四寸	二尺五寸
床框の高さ	二寸六分	二寸五分	二尺六分
落掛の高さ	四尺八寸四分	四尺八寸二分	五尺一寸五分
厚さ	一寸一分半	九分	一寸一分
床天井高	六尺一寸四分	六尺一寸	七尺六寸



図6 S邸小間床の間

ており、この作品でも同様である。天井高に合わせ、全体の部材の位置が高くなり、蹴り口も大きくなっている。全体に使い勝手がいい様に寸法が決められ、結果として大らかで明るい空間となっている。屋根の「起くり」によって柔らかな印象を持つ外観と共に、松下幸之助と裏千家家元が提唱した「和敬静寂」の精神が表れていると言える。

②八畳間（広間）

広間には、雁行配置の構成を利用して、付書院が内露地へ向かって確保されている。庇の下は土間になっており、軒桁の下にガラス戸、木戸が嵌り内部空間になる。平面図を見ると、その開口部の位置が戸一枚分広間の障子とずれている。この事によって床の間からの庭への眺めが真直ぐではなく、外露地から内露地へ斜めにのびている。この事によって、狭い敷地に広がりを持たせている。

柱径は、小間の二寸八分よりも四分太い三寸二分となっており、床柱はさらに太く四寸三分である。中村外二の他の作品に比べて木割は太い。天井高は八尺で、利休の聚楽屋敷の「色付九間」書院と同寸法である。また、ツラの寸法も全体の木割と合わせ小間に比べて高く取られているが、さらに土間で一段下がる場所では、内部の柱と同じ高さにツラを施すなどの工夫が見られる。

付書院の天井は、掛込天井となっており、壁留めが低い位置が床下より五尺四寸六分と低い位置に設定される事で、独立した小さな空間が成立している。

③風呂場

近代数寄屋建築において、風呂場の設計は多く見られるが、特に中村外二の作品では旅館、個人住宅の中で魅力的な空間を作り出している。裏庭に坪庭が作られ、それを借景として一枚ガラスの引き違い戸が低い位置に嵌められている。天井高は六尺七寸、高さ一尺五寸の位置まで石貼りになっており、小間における腰貼りと類似している。

6.4 素材

①小間と広間

小間では、主要材が北山杉、床柱に赤松の皮附丸太、その他には辛夷材が廻り縁に使用されている。これは、近代茶室では「一般的」な素材の組み合わせである。中村外二の作品には、この様に数寄屋産業に特化して生産されている木材を使用しながら空間構成によって多様性を生むものと、古材を使用し、素材自体が個性を生んでいるものがある。一方、広間はその作品もしくは施主の性質が最も良く表れる。施主の趣味に合わせて選択された床柱によって全体の木割が設定されるからであり、この作品では、太い北山杉の絞り丸太を中心に木太く大らかな空間が演出されている。

②北山杉の利用／木材の「けしき」

小間、広間共に主要材は、北山杉丸太に統一されているが¹⁷、同じ北山杉でも「エクボ材」と呼ばれる、表面に枝節の痕跡が残る材を使用したり、絞り丸太を使用し、微少な変化によって空間を彩取っている。これを木材の「けしき」として、特に名匠上坂浅次郎がその使用に関して腕を振るったとされる。

③板材の利用

S邸では、板材の使用は少ないが、既存家屋から各室にアプローチする為の廊下と付書院の文机に一枚板の日向松が使用されている。この作品の場合玄関口にあたる板材が全体の空間の導入部分として重要な役割を持つ事がヒアリング調査から明らかになっている。その板の物理的な柔らかさから生じる「温度感」によって空間に緊張感や親近感を与える事ができる。

④聚楽壁

木材の他に重要な数寄屋建築の構成材料として聚楽壁がある。これは左官によって塗り込まれるが、土中のバクテリアが土を腐食させる事で徐々に色が濃く変わってくる。その結果、下地の通し貫の部分が縞模様の様に浮き出てくる。この様な経年変化をあらかじめ計算に入れ、通し貫の位置が揃えられている。これは、歴史的に継承された茶室の意匠ではなく、近代数寄屋大工がその経験から生み出した新たな要素である。

6.5 技術

作品の中には、近世以前からの数寄屋建築の手法が洗練化された技術と、新たに近代に導入された金物を利用した技術が見られた。

近代の数寄屋用材の生産現場で高度な規格化が進み、それが川下の建築で洗練された美しさを生み出す要因となっている。さらに、部材の接合部分を正確な寸法でおさめる技術が高度に発達している事が図6の軒裏の写真からもわかる。また、木材だけではなく、差石の寸法も綺麗に揃えられており、図7のように、敷地の高低差を調整するための技術も見られる。

中村外二の図面の中に金物の使用が見られる。一つは、屋根裏のハネ木として使用されている。もう一つは、柱と根石、さらに土台をボルトで締めている。これは、軽い建築が台風などによって飛ばされない様にした工夫である。また、半足固めや貫などの横材と柱材もボルトで締められているが、これは一つには、地方や海外で茶室を組み立てる際の効率化を図るためでもあり、さらに木材が伸縮する事によって緩くなった接合部を事後的に調整ができる様に工夫した技術である。

7 中村外二の仕事の特質

中村外二の一作品の調査を通じて、その空間構成、素材利用、技術の全てが近世から引き継がれた生産システムを基盤にしながら、近代において新たに展開されていた事が明らかになった。本節では、その展開を促した要



図7 S邸 段差の解消



図8 S邸 軒裏のおさまり

因を主に人間関係、森林の状況から論じ、さらに中村外二が展開した新たなコンセプトについていくつかの作品を事例に挙げる。

7.1 「当世流」の展開と施主／建築家との関係

中村外二の作品の根底に流れるのは、裏千家家元と松下幸之助と共に模索した「当世流」の思想であると考えられる。数々の普請の中で得られた寸法体系、空間のアンビエントは、中村外二自身による設計・施工の作品にも反映されている。特にS邸の様に千家の茶道に関わりを持つ施主の普請ではその傾向が強い。

同時に、今日庵や大徳寺の茶室群に直接触れる事で、大工ならではの五感性を伴った建築思想が生まれる。その思想に影響を与えたのが、同じ日本芸術の分野で暗中模索していた近代画家ではなかったかと思われる。特にその素材への徹底したこだわりは、鳥海青児の手法論に類似している。

一方、建築家による共働の中でそれまで伝統的な数寄屋建築では生まれようもないコンセプトが登場したと考えられる。

7.2 近代の森林の状況と数寄屋建築

数寄屋建築の使用に耐える良質な木材を入手する事は近代の森林の状況では次第に困難になっていた。その中で、中村外二を始めとする数寄屋大工は、森林に自ら足を踏み入れ良質な木材を探し求める必要があった。吉田五十八が、木材の質にこだわらない「新興数寄屋」の開発を目指したのに対し、中村外二は徹底して良質な木材を追い求め、施主に応じて作品の中に投入していった。その結果、木材利用に棟梁の思想が如実に表れる結果となる。現代社会では森林と日常的な生活との距離は広がる一方であるが、中村外二は都市生活と森林を結び付ける重要な役割を担ったとも言える。

7.3 素材利用の事例

中村外二の作品では、特に素材の利用に関して独自の思想が展開され、日本の伝統建築が新たな局面を迎えた事を証明している。以下にヒアリング調査と作品の分析から明らかになったいくつかの事例を提示する。

①長木材によるパースペクティブの表現

図8の広縁では、長さ40尺の赤松の長押と60尺の北山杉の桁が通され、空間にダイナミックなパースペクティブがかかっている。他にも廊下の天井に一枚張りの桧板(33尺×3.795尺)を使用する事で迫力のある空間を作り出している事例もある。

②異なる素材による温度感の表現

図9は、木材によって温度感を表現した事例である。手前から、固い栗板、柔らかい赤松の桧板を使用する事で、足裏で徐々に温かさが増す様な仕掛けになっている。表面を「なぐった」板を使用すると、足裏と板との間に空気層ができ、さらに温かい材質となる。

③経年変化によって表れるもう一つの幾何学

図10は、中里邸の茶室の聚楽壁であるが、S邸に見られたのと同じ様に



図9 汗牛荘広縁



図10 神事秀明会祭事棟玄関 踏台栗、式台赤松中桧板

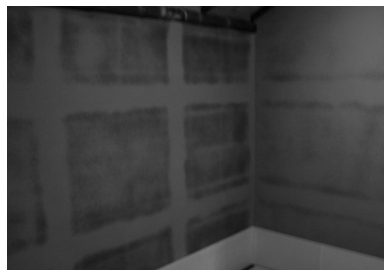


図11 中里邸 茶室の聚楽壁

経年変化で通し貫が表面に表れている。S邸に比べ、この作品では、貫の位置で積極的に幾何学を表現されており、20年後の変化が計算されていた事がわかる。

結 中村外二の仕事と近代数寄屋建築

本稿では、近代の数寄屋建築界をめぐる状況と一連の調査から、中村外二という数寄屋大工棟梁の作品の一面を明らかにした。そこから、近代数寄屋建築が伝統的な建築産業に基盤を置きながらも、この時代特有の展開を見せていた事がわかる。最後の「数寄屋建築家」と呼ばれた中村外二の作品について、茶室建築の寸法体系における「当世流」の展開と素材利用における思想に着目して分析を進めた。さらに、既に一般化していた江戸期の数寄屋建築の木割法、中村外二が実測を通じて参照した京都の国宝建築の数々との比較の上でその作品の本質に迫る事が可能となる。

中村外二の作品は「隠花植物」と表現される様に、国内外の広域に渡る都市の中で私有財産として現存しながら、一般の目に触れる事はほとんどない。それだけにその実態は掴みにくい。しかし、全国の森林から収集された貴重な木材が息づき、近世から継承された技術と近代日本の思想に基づき展開されたこれらの作品が持つ芸術的価値の高さは明らかである。

注

- 1 ここで言う「数寄屋造り」とは、茶室とその意匠を展開した書院造りの事を指す。
- 2 京都南禅寺界隈の野村碧雲荘については、矢ヶ崎善太郎による先行研究がある。
- 3 堀口捨己は、茶室建築の古典を多くの文献から復元し、その空間を読み取る思考法を定着させた。吉田五十八は、近代の生活様式に適した新たな数寄屋建築のあり方を模索し「新興数寄屋」という全く新たな様式を生み出した。
- 4 千利休の正統の血筋を引く家元として、裏千家、表千家、武者小路千家があり、その他に遠州流などの流派が存在する。
- 5 西山松之助による家元制度に関する一連の研究がある。近世までの「完全相伝制」から「不完全相伝制」へ転換され「家元が免許秘伝の最終相伝権を独占しない」事で膨大な茶道人口を統括したとしている。
- 6 花札を使用してゲームの様に展開される茶事。そのための設備として、八畳間と四畳半の茶室が必要となる。
- 7 京都北山地方に江戸期から発達した数寄屋用材に特化した林業。枝打ちから砂によって表皮を磨き落す作業まで、丁寧な作業が加わる。また、細い丸太材を効率的に生産するための「台杉仕立て」や人工的に「絞丸太」を造り出す技法などが発達した。
- 8 海外の安価な木材の流入により、国産材の競争力が落ちる。安易な作業の効率化によって木材の質は落ち、良質な木材の価格は高騰する。
- 9 中村外二の普請歴は、参考文献7.所収
- 10 この様な大工の修業形態を「西行」と呼ぶ。
- 11 近代数寄屋大工の系譜については、参考文献9.に詳しい。
- 12 松下幸之助が寄進した9つの茶室は、全て中村外二の施工により、裏千家家元鵬雲斎が関わった普請である。(参考文献10.所収)
- 13 鳥海青児(1902-1972)「マチエール」を重視した近代洋画家。絵の具を幾度に渡って塗り重ね、独特の素材感を生み出す。大工の技術である、「なぐり／はつり」を使用し、工芸的な要素も持つ。
- 14 下保昭(1927-)水墨画家。自然界のエネルギーを伝える独特の画風を展開する。
- 15 中村外二の普請歴で「茶室」と分類されているものは、主に茶室として使用される建築の事であり、この場合小間、広間、水屋の他に風呂場、便所も含んでいる。
- 16 古式の茶室の復元アイソメ図と寸法体系は、中村昌生による。(参考文献11.)
- 17 文学者や批評家によって「日本的なもの」が追求される中で、「自然(じねん)」という概念が定着する。それが、木材の利用においては、「素木」と読み変えられた。桂離宮や利休の妙喜庵待庵に共通するのは、その木材がベンガラなどによって黒く色付けがされていた事である。しかし、近代においては、木材の肌理をそのまま見せる「素木」が利用され、寸法が綺麗に揃った白い北山杉が好まれた。

参考文献

1. 笠井一子著『京の大工棟梁と七人の職人衆』(草思社 1999)
2. 京都府山林会『京都府山林誌』(京都府林業組合連合会 明治 42)
3. 熊倉功夫『近代茶道史の研究』(日本放送出版協会 1980)
4. コンラッド・タットマン『日本人はどのように森をつくってきたか』(築地書館 1998)
5. 全国銘木連合会『銘木史』(1986)
6. 谷端昭夫『近世茶道史』(淡交社 1988)
7. 中村外二工務店監修『匠技-大工・中村外二の仕事』(青幻舎 1997)

8. 中村外二工務店監修『中村外二数寄屋建築施工集』（淡交社 1978）
9. 中村昌夫監修『数寄の工匠・京都』（淡交社 1986）
10. 中村昌生監修『松下真々庵茶室集録』（淡交社 1976）
11. 中村昌夫著『茶室の研究』（墨水書房 1991）
12. 西山松之助著『家元の研究』（1982）
13. 農商務省山林局編『木材の工藝的利用』復刻版（林業科学技術振興会 1982）
14. 日向進著『近世京都の町・町屋・町屋大工』（思文閣出版 1999）
15. 『鵬雲斎千宗室好者聚成』第三卷（1995）
16. 堀口捨己著『書院造りと数寄屋造りの研究』（鹿島出版会 1978）
17. 堀口捨己著『茶室研究』（鹿島出版会 1987）
18. 堀口捨己著『庭と空間構成の伝統』（鹿島出版会）
19. 吉田五十八著『饒舌抄』（新建築社 1980）

〔2003.7.7 受理〕

〔2003.12.24 採録〕

論文に関するコメント

本論文は、従来のいわゆる茶室論・数寄屋論にとらわれず、自由な視点で近・現代数寄屋を論じたところに特色がある。今後、茶室が「茶のための空間」であることを強く意識しつつ研究を進めれば、より豊かな展開が期待できると思われる。

神奈川大学工学部 西和夫 記